

=====  
克蘭・コラ Cran Coille : ケルト・北欧音楽の森

Editor : hatao

May 2019 Issue No.294

ケルトの笛屋さん発行

<http://www.celtnofue.com/>

=====  
克蘭・コラは月に2回、ケルト音楽、北欧音楽に関する話題をお届けする国内でたったひとつのメールマガジンです。10日はライブ情報号として全国のライブスケジュールを配信、20日は読みもの号として各ライターからの寄稿文をお届けします。

この音楽にご興味のある方ならどなたでも寄稿できますので、お気軽にお問い合わせください。

CONTENTS

- (1)私とケルト音楽 恩田裕之さん前編 天野朋美
- (2)外国人はエッチではないという話 field 洲崎一彦
- (3)Colleen Raney——アメリカで伝統をうたう試み・その20 大島 豊
- (4)hatao & nami "Silver Line" レビュー 大島 豊
- (5)編集後記

■  
■ (1)私とケルト音楽 恩田裕之さん前編 天野朋美  
■  
■

第一回：ラジオ番組パーソナリティ 恩田裕之さん 前編

様々な分野で活躍している方をゲストにお招きし、ケルトにまつわるお話を伺う「私とケルト音楽」。第一回は、鎌倉エフエム「MCおんのおん☆しつ」などラジオ番組パーソナリティとして活躍している恩田裕之（おんだやすゆき）さんです。さて、ラジオ番組パーソナリティとケルトはどのように繋がるのでしょうか。どうぞお楽しみください。

○知らぬ間に聴いていたケルト音楽

——恩田さんとケルト音楽の出会いを教えてください。

恩田：実は最初はケルトという言葉自体は知らなかったのですが、今回インタビュアーとして来てくれているティンホイッスル奏者でありシンガーソングライターの天野朋美さんが僕の番組にゲスト出演したときに、「聴いていると頭の中に自然の風景の映像が浮かんでくる…この雰囲気はケルト音楽だったのか！」と発見がありました。アイルランド自体もサッカーで聞いたことがある程度でしたね。僕の好きな映画音楽の中でも調べていくうちにあれもケルト、これもケルトとどんどん出てきて…。実はケルトの要素が入った音楽をたくさん聴いていたと気づいたんです。

○空気に溶けていくような優しい音色

——恩田さんのケルトを知るきっかけになり光荣です！お仕事をされている中で、いろいろな音楽を聴いたりミュージシャンに出会う機会が多いかと思いますが、恩田さんの思うケルトの魅力はどんな所だと思いますか？

恩田：一言でいえば、優しい音色ですね。特にティンホイッスルは、リコーダーにもフルートにも、弦楽器にもない、空気に溶けていくような音だと思いました。発した声は二度と戻ってきませんが、ティンホイッスルの音色は空気と混ざり合い空間を揺らすような音楽だと思います。その波長が体に入ると、琴線を揺さぶるのだと思います。強すぎず弱すぎず、人間にとって心地いい風の強さ…風当たりのいい音です（笑）！聴いている人は、ケルトの音色が溶け込んだ空気での呼吸をするような感覚になるのではないのでしょうか。

調べてみると、色々な作品でティンホイッスルは使われているんですね。まずは僕が昔から好きだった「ロード・オブ・ザ・リング」のサウンドトラック。トラック17に7分近い大作の曲が入っているんですが、この中の2分20秒からしばらくティンホイッスルのソロがあります。そのあと4分35秒あたりから、またティンホイッスルがスッと入ってくる。映画のラストの方でこの曲が使われているんですが、そこがまたいい場面で涙を誘うんですよ！他には、日本の映画の「ローレライ」、NHKドラマの「マッサン」、ゲームソフトの「Final Fantasy」、ジブリ映画の「ゲド戦記」でも使われていますね。

○ケルト音楽が知られていないのはもったいない

——とてもお詳しいですね！どうやって調べたのですか？

恩田：インターネットで調べていたら、「サウンドトラックの中のケルトの笛」7という所に詳しく載っていたんですよ。

——それは…まさにこのインタビューが掲載される「ケルトの笛屋さん」のページです！

恩田：そうだったの？それは嬉しい偶然ですね！他にもいろいろ調べたけれど、このページが一番詳しく書かれていましたね。こんな風に様々な映画や作品に使われているのに、ケルト音楽というものがあまり知られていないなんて本当にもったいないですね。日本でケルト音楽を演奏するベテランの方もいらっしゃるようですし、もっと日本で普及させるべきだと思います。（つづく）

ラジオ番組パーソナリティの恩田裕之さんをゲストにお迎えした第一回「私とケルト音楽」。今月はここまでです。次回も引き続き恩田さんをゲストに、ラジオで流す音楽へのこだわりや横浜とケルトの知られざる繋がりのお話をお届けします。どうぞお楽しみに！

### 【Profile】

ゲスト：恩田裕之（おんだやすゆき）

神奈川県出身。ラジオ番組パーソナリティからクレイジーケンバンドライブMCまで、声のお仕事のスペシャリスト。

インタビュアー：天野朋美（あまのともみ）

山梨県出身。ケルトの魅力にハマってしまったシンガーソングライター、ティンホイッスル奏者。ケルトの妖精と日本の妖怪が好き。

[https://twitter.com/ToMu\\_1234](https://twitter.com/ToMu_1234)

---

## ■ (2)外国人はエッチではないという話

field 洲崎一彦

---

今回は、外国人の楽器がうまくない人の演奏は、日本人の楽器がうまくない人の演奏と、何かが根本的に違うぞ、というお話しをしました。ずばり、音楽話題でこの話を続けていくと非常にややこしい話に進んで行く予感があってなかなか微妙です。

それで、今回は、音楽では無い部分で、ここって、日本人と外国人では何かが根本的に違うよな、というお話しをしたいと思います。

いわく、女性のファッションです。最近では蒸し暑い日もあって、人々も一気に薄着になって来ましたね。そして、ここ京都の烏丸では相変わらず外国人観光客の皆さんが大勢闊歩しているのですが、彼らはすでに日本人よりも一歩先んじて夏の装いであることがとても目につきます。

中には、モデルばりのスタイルの金髪お姉さんがTシャツ、短パンでノシノシ

歩いている。日本女性も負けじと脚や肩を露出してしゃなりしゃなりと歩いている姿も見かけます。私はおっさんなので、遠慮無く彼女達に目を向けてしまうわけですが、なんか、どうにも、醸し出している雰囲気が違うのですね。

外国人お姉さんは時には明らかに胸をゆっさゆっさと揺らせているような人まで見かけます。が、絶対に日本人しゃなりしゃなりお姉さんの方がエッチですよ。外国人お姉さんはそれほどエッチな感じがしない。

それって、おっさんの好みの問題でしょ？

と、この手の話は、すぐに、このように突っ込まれてしまうのですが、今は、そういう、庶民的な話をしているのではな—い！

いや、私も庶民的な話をする時はしますが、ここでは、そういう話をしているつもりではないという意味です。

物理的に、人間の身体という形があって、それはそれぞれに各部の比率や長さ太さに違いはあるものの、ある程度は皆さん同じような形をしていると見なします。そこに、何らかの布をまとっている。ここまでは、物理的には一緒。つまり、事実としてそこにあるモノは似たようなモノのはずではないですか！？

なのに、日本人と外国人でワタシらおっさんが受ける印象がこんなに違うのは何でなんやろう？これは、ある意味素朴な疑問でもあるわけです。

なんで、より多く露出している外国人女性の方がエッチではないのか？！

一般人を対象に語るとちょっと変な方向に行く危険性があるので、では、話を芸能人とかにふりましょう。

例えば、あまり詳しくはありませんが、日本の芸能人で若い女性と言え、いわゆる、アイドルの皆さんですよ。この人達も当初とは違って最近はけっこう露出度が高いでしょ？ 思わせぶった写真集とかばんばん出しているじゃないですか？

これが、外国人となると、どうか。外国のアイドルって誰なのかよく知りませんね。でも、例えば、ロック畑なら、今はもう若くはないみたいですが、アヴリル・ラヴィーンとかテイラー・スウィフトとか、YouTubeで見かけるとけっこうきわどい衣装を着てきわどい動きとかしてます。しか—し！断然、乃木坂や欅坂の方がエッチじゃないですか？

ひとことで言えば、アメリカお姉さん達はまずもの凄い貫禄がありますね。何か見えた？見たきゃどうぞ。みたいな、迫力があります。気の弱い男なら泣き出してしまいうぐらいの怖さがありませんか？

それに対して乃木坂はどうでしょう？ え？。。。見ないで。。。汗。。。というような、良く言えば、恥じらい、と言うのかもしれないが、そんなものが見え隠れする。こっちの方がいやらしいくなりますよね。それって、ものすごくエッチでしょう？

いったい、クランコラ誌上で何の話をしているのか！と、叱られそうですが、いや、言いたいのはここから先の事なのです。

ファッションも表現ではないですか。音楽はもとより表現です。音楽は12種類の音階を使ってそれを順番に並べる作業としての共通認識で日本人も同じルールに従ってこれを行うので、一見、同じようなことをしているように見える。が、ファッションはそこから醸し出される雰囲気がこれほど違うのだから、違うということが判りやすいのではないかと思ったのです。

つまり、ファッションというのは表現としてエッチな感じを出すのが目的ではありません。そこ、外国人の皆さんは徹底的に毅然としている。自己表現という意識が凄まじく強力なのではないかと思うのです。

例えば、日本で痴漢事件があった時に、昔から必ず陰の声として、男が劣情をもよおすような格好をしている方が悪い！という意見が出て来ます。この意見って、もしかしたら、アメリカあたりではあり得ないのではないのでしょうか。私はそんな事を表現するつもりでこのファッションをしているのではない！という毅然とした表現姿勢を皆が理解しているので、こんな意見は出て来ようがないのではないかと思うのです。

しかし、日本人にはこの表現という意識、発想そのものが希薄ないしは欠落しているのではないか。だから、ファッションはファッションという表現ではなくて、身体にまとっている布に過ぎないわけです。そうなると、その布が薄く小さくなればなるほど、自分は裸に近い格好をしているのではないかというためらいをどうしても隠すことができない。そういうメンタルではなかなか胸を張って歩くことなんて出来ないでしょう。

だから、乃木坂はエッチなのです。そして、初心者ギタリストは邪魔な音を出してしまうのです。

だったら、日本人女性も露出して胸を張れば、あのような迫力が出るのか？という事になるのですが、それは、だったら、初心者ギタリストがとりあえず思いつき大きい音で弾けばいいのか？という話に通じてしまうので、なかなか、そう簡単なものではないのですね。

が、しかし、例えば、椎名林檎などはステージではけっこう露出しています。が、確かにそんなにエッチではない。それは、彼女の音楽をも含めて独特のカリスマ性を演出している部分。この部分はそのファッションにマッチしていることを私達に納得させる何か。つまり、そこには、確信犯的な何かの意図が感じられるというポイントがあるように思います。

乃木坂にそれほどの意図があるのでしょうか？演出家に意図はあっても本人達にその意図があるのか？

ここがヒントだと思うのです。初心者ギタリストの諸君が何か確信犯的な意図

とその表現意欲を持って思いっきりギターを弾く時、そこには、やはり、何かが放出されるのではないかと、そのように思うわけなのです。

ということで、この夏は私も確信的な意図を持って露出に励んでみようと密かに思ったりして（うそ）。。（す）

---

■ (3)Colleen Raney—アメリカで伝統をうたう試み・その20

■ 大島 豊

---

アメリカのケルト系シンガー、コリーン・レイニィの録音を聴くシリーズ。4枚めのアルバム《Here This Is Home》の第7回。

#### 09.The Cruel Brother05:34

チャイルド11番、Roud 26番の古いバラッド。いわゆるマザー・バラッドの一つ。ある王家の姫を旅の騎士が見初め、求婚する。姫は父王、母女王、姉アン、兄ジョンの承認を得るようという。騎士は両親と姉の承認はとりつけるが、兄にことわるのを忘れる。婚礼の日、兄は花嫁を馬に騎せ、刺殺する。花嫁は死ぬ間際、両親と姉に遺品をのこすが、兄には死刑台と縛り首の縄を残す。

伝承の「残酷」バラッドのタイトルには mother、sister、brother、あるいはまた sea capteain や ship's carpenter はあるが、father は無い。歌詞の内容には cruel father というフレーズは出てくるが、歌のタイトルにはみあたらない。

起源はどうやらスコットランドで、スコットランドのシンガーが多くとりあげる。

#### Archie Fisher, The Man With A Rhyme, 1976

スコットランド伝統歌謡の長老格の絶頂期の滋味あふれる歌唱。ちょっと喉を絞っているように聞えるが、歌唱自体はごく自然で、暖かい声で坦々と唄われると、悲劇性が高まる。左右にギターを配するシンプルな組み立て。"Hech, hey' and the lily gay" という2行めのリフレインで最後の "gay" を高く、強調するのが、物語が進むにつれて不気味さを増す。現代におけるバラッド歌唱のお手本。

#### Battlefield Band, Battlefield Band, 1977

モダン・スコティッシュ・ミュージックの幕を開いたバンドの地元デビュー作（なぜかデビュー作はフランス盤）。リード・ヴォーカルはジェイミー・マクメネミィ。かれは後にブルターニュに渡り、Kornog に参加。左にブライアン・マ

クニール、右アラン・リードのコーラス。リード・ヴォーカルに軽くリバーヴをかけている。始めはアラン・リードのオルガンをバックにゆったりと入り、やがて、右にジョン・ガハガンのホイッスル、真ん中右にマクメネミィのポルチュギース・ギター、左にマクニールのブズーキが入る。半ばで、ブズーキとポルチュギース・ギターが緊迫感とテンポを高める。メロディはスコットランドの"The Jolly Beggar"。

プランクシティがモデルであるのは明らかだが、マクメネミィとマクニールの、芯の太い、一種突き放す歌唱がスコットランドらしい、温もりと荒涼感の同居する世界を生み出す。

#### Bobby Watt, C'est Watt, 1994

カナダのシンガー。下のディック・ゴーハンに近いヴァージョンを、エレキ・ベース、ボンゴなどのパーカッション、エレキ・ギターのエフェクトも使って展開する。シンガーとしては一級の人だが、歌唱だけではゴーハンに及ばないことを自覚して、バックのアレンジで歌を支えようとした意図は成功している。

#### Dick Gaughan, Prentice Piece, 2002

スコットランド伝統歌謡界の「キング」畢生の歌唱。バラッドを唄ってここまで迫力満点にできるのはこの人くらいか。後続への影響絶大。自身のシンプル極まるギター一本がバック。基本的にはアーチャー・フィッシャー版だが、メロディとリフレインはかなり変えている。

#### Tempest, Shapeshiter, 2003

アメリカのケルティック・ロック・バンドの2004年のライヴ版。フィドル、エレキ・ギター、マンドリン、男声リード・シンガーと女声のコーラスを中心としてプログレ的組曲に仕立てている。途中、関係ないメロディを次々に放り込む。後半、歌が終わってからはダンス・チューンやそのレゲエ的解釈も入れる。

このバンドはオスロ生まれの Lief Sorbye がサンフランシスコに移り、The Incredible String Band にヒントを得て、1990年頃に結成。

#### Martin Simpson, Kind Letters, 2005

イングランドの大ベテランのシンガー／ギタリスト。ゴーハン版をやや速めのテンポで標準英語で唄う。ギターはこの人らしく、複雑なことを軽々と聞かせる。3分の1くらいからフィドルが左に加わる。さらにギターとフィドルに電気が通って、バラッドの偶数行コーラスの代わりをする。

このアルバムはブリテンのビッグ・バラッドをはじめとする伝統歌ばかりをと

りあげ、アイリッシュの当時の若手トップ・クラスのミュージシャンたちを起用した異色作。

#### Maeve MacKinnon, Don't Sing Love Songs, 2007

スコットランドのシンガー。アーチャー・フィッシャー版。コリーンはこの録音でこの歌に出会った由。リリカルなギターをメインに、ダブル・ベース、2本のフィドルがしっとりした色つけをする伴奏で、一見軽やかに、ややポップにも響く歌唱だが、粘りがあり、押えるところはきちんと押えて、これはベストの歌唱の一つ。

#### Colleen Raney

ギター、さらにピアノとダブル・ベース、最後にはドラムスも入るバックはむしろビートを強調する。ピアノの間奏も含めて、アレンジは明るく、メロディも明るい、歌唱そのものはやはり抑えた色調。メイヴ・マキノンのヴァージョンに倣い、歌唱は粘りがあり、その上にこの人の特徴の一つでもある、歌詞を丁寧な唄うので、歌詞を知らないとあっけらかんと聞き逃しそうになる。こういう悲劇のバラッドは悲劇的に唄ってはリアリティに欠けてしまう。いかに力を抜くか、抜く一方で押えるべきところをいかに押えるかに、シンガーの工夫が出る。コリーンはぎりぎりのバランスをとっている。

以下、次号。(ゆ)

---

■ (4)hatao & nami "Silver Line" レビュー  
■ 大島 豊  
■

---

2014年6月、このアルバムのレコ発に飛び入りしたトシバウロンによれば、デュオとしては6年前にすでに始めていたそうです。実際、2007-12-20の日付のButter Dogsのライブでは、後半Namidori名義の演奏が収められ、どちらのトラックにも互いのメンバーが参加しています。さらに2011年のhataoのソロ・アルバム《縁》では、全篇にわたって上原奈未名義のピアノ、ハープシコード、ハープがフィーチャアされていました。このソロはドレクスキップをはじめ、ノーサンブリアン・パイプ、シタールやフラメンコ・ギター、さらにはヒップホップ流の打ち込みなど、幅広いジャンル、スタイルの音楽家を招いた饗宴盤ですが、上原のピアノは一見かけ離れた音楽を巧妙につなぐ一方で、正面でメインのメロディを担当したり、楽しい変奏を展開したりして、陰の主演と言わなければならない存在でした。



そうした「前兆」にもかかわらず、二人の名義のアルバムが出た時、どういうわけか意表を突かれた想いが消えませんでした。この組合せが不似合いという強過ぎますが、楽器のとりあわせはともかく、この二人が対等のデュオを組むのが、どこか不思議でしかたがないと感じられたのでした。

おそらくそれは筆者がふだん二人のライブに接しておらず、それぞれの録音だけを聴いてイメージを組み立てていたせいでありましょう。hatao のライブは遙か昔に Butter Dogs として2度ほど見ただけで、nami にいたっては、上記のデュオでのライブが生に接する初めての機会でした。

そのイメージは、このアルバムのリリース当時の紹介でも書いたことですが、hatao の方はストイックにフルートを極めてゆく、ほとんど求道家に近いものでした。まだ今のように笛なら何でもござれの多様さは見えず、ホイッスルやロウ・ホイッスルを混ぜるくらいで、楽器としてのフルートの可能性をとことん追求すると見えていました。nami の方は ほぼ Shanachie の録音だけを通してのもので、hatao とは対照的に型にはまらず、音楽を面白くするためなら掟破りも平気、伝統音楽とはそこで遊ぶための遊園地、と見えていました。Shanachie が前年に出した《Ljus》で、北欧の伝統歌をもの見事に日本語化してみせた離れ業に、そうしたイメージが一層強化されてもいました。

このデュオはこれまで3枚アルバムを出していますが、このファーストからは後の2枚はやや距離があります。今後、二人がどのような音楽を展開してゆくかはわかりませんが、後の2枚の傾向が続くとすれば、これはなかなか貴重な成果です。hatao の流れからいえば、これは前作のソロ《縁》で実験したことを咀嚼吸収して、自らの音楽として織りなおしたものと言えましょう。nami の方では、バンドではなく、デュオでやることによる自由度の高さと、一方で相手との対話を余儀なくされる制約という相反する環境を使いこなすところに新たな「遊び」を探っていると言ってみましょう。

まず、レパートリーの面、つまり素材としてはケルトの枠をはずし、ノルディックや東欧に範囲を広げ、さらには各々のオリジナルも積極的に採用しています。後の2枚の素材がどンドンノルディックに傾いてゆくことから見ると、素材の幅が最も広がっています。伝統曲またはそれに近いものと二人のオリジナルがほぼ半分ずつ。

楽器編成では、nami のメインはピアノで、オルガンやシンセサイザーも使い、ハープはまだ一部で、新鮮な印象です。また、フィドル、ヴィオラ、チェロ、ダブル・ベース、それにパーカッションの共演陣も、大きく音楽を膨らませる方向で参加しています。後の2枚では、サポートは最小限に絞り、できるだけ二人だけで音楽を組み立てるようになります。

アレンジでも共演する楽器を積極的に使い、カラフルな音を重ねてゆく方向です。プログラミングによる打ち込みやシンセサイザーのような、電子音も音の表

情やテクスチャをより多様にし、変化に富む効果を生んでいます。しかもアコースティックな楽器の音とごく自然にからんでもいます。後の2枚では、電子音の使用はほとんど無くなり、生楽器の音のシンプルな組合せが中心になります。

ここでの電子音の使い方に匹敵するものは、国産舶来を問わず、ヨーロッパのルーツ系の録音ではほとんどありません。この方面では惜しくも亡くなったスコットランドの Martyn Bennet が筆頭と言っていると思いますが、彼は例外的な存在で、たとえば hatao のソロ《縁》での〈The Way East〉のように、成果を上げているのは外部、つまり電子音をメインに使って音楽を創っている人びととのコラボレーションがほとんどです。それに対して本作での電子音はルーツ・ミュージックをその表現の主なメディアとしているミュージシャンが自ら作っている。楽曲全体の見通しにおいて、電子音楽を創るのではなく、ルーツ・ミュージックを創るにあたって、電子音を使うことが望ましいとまず判断し、その上でではどのようなサウンドをどのように入れてゆくかを考えています。

自然には存在しない音、あるいは存在はしても録音に使うことの難しい音をプログラミングなどによって電子的に生み出して利用することは、我々にとっては同時代の音楽の一部です。好むと好まざるとに関らず、音楽として耳に入らざるをえません。こういうものは心の底に蓄積されて、知らず知らずのうちに我々の感性の一部になります。電子音を耳にすると、反射的にそこに同時代性を感じるようになるわけです。音楽を生み出す側にとっても、従来利用できなかった音が利用できるのは創造性を刺戟されるでしょう。

このアルバムでの電子音の使用はもちろんもっと複雑な作用です。基本的には新しいシチュエーションを生み出す、音楽を新鮮なものにするところから出発していると思われませんが、複数の狙いの中にはより遠い射程をもったものもあります。例えば〈Time Flow〉に現れる、湧き水が出るような、あるいは大きな泡が水面に浮かぶような、ぼわんという音。ビートないしリズムと呼ぶには大きすぎますが、一定の間隔で聞えるこの音は、一見楽曲とは無関係に聞えますが、その実楽曲をより広いフィールドにつないで、いわば自然界全体の中に拡大しています。タイトルにある「流れる時」の具体的な表象でもあります。

この曲では他にも様々な響きを持つ電子音の短かい断片やフレーズが鏤められ、重ねられています。その各々が上記のぼわんと同様に、それ自体聴いて愉しいだけでなく、全体としてある情景を生んでもいます。モザイクの一つひとつの断片が独自の美しさを持ちながら、全体としては全く別の情景を映しだすのに似ています。ただ、ここで浮かび上がる情景は固定されてはおらず、常に流動し、変幻しています。アニメ『イエロー・サブマリン』の「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイヤモンド」のシーンで空に浮かんだルーシーの姿は変わらぬまま、その内部が変幻してゆくものにも通じます。この曲の生み出す情景はもっとずっと複雑で、捉えがたい。聴くたびにまた異なった様相を見せてくれます。無から有を生じさせる電子音だけでなく、深いリヴァーヴをかけたピアノ、そしてこちらにも幾重にも重ねられた各種の笛の音からも、時の流れを外から眺めたと

すれば見えるだろう幻想的情景が浮かびます。

各々はシンプルなフレーズや音を重ねて、複雑で奥行きのある情景を生み出すのは Shanachie が活用する手法でもあります。この手法は録音でこそ威力を発揮しますが、同じことをライブでやるのはまず不可能です。後期ビートルズはそこにのめりこんで、ライブをやめてしまいましたが、hatao と nami にとっては音楽活動の中心はあくまでもライブでしょう。この後のアルバムでこうした手法が減ってゆくのは、ライブで同じ効果を再現したり、さらに発展させることができないためかもしれません。

一方で、この曲は録音作品としてひとつの究極と言ってもよいと思います。これを味わうにはできるだけ性能と品質の良いシステムが求められます。システムの質が上がるほどに、新たな相が顕われてきます。そして何度聴いても面白い。聞き慣れたはずのフレーズやメロディや、あるいは音の断片が、聴く度に、はっと驚くほど新鮮に聞えます。これはルーツ・ミュージック、伝統音楽の原理とは対極にある、とも言えるでしょう。にもかかわらず、目指すところはルーツ・ミュージック、伝統音楽の目指すところに重なります。これは矛盾かもしれません。だとすれば、それは豊饒を生み出す矛盾です。

冒頭の二つのトラック以外の曲では、電子音や効果音はほとんど使われず、代わりにストリングスやパーカッションなど、生音を様々に重ねます。その点では〈Time Flow〉は本作全体の中でも例外的な楽曲なのですが、アルバム全体や個々のトラックを繰り返し聴いてゆくと、これが全体の中心であり、アルバムを象徴する曲になってきます。ここにはこのデュオが持つ様々な可能性のうちでも、最大の 하나가凝縮されています。

〈Time Flow〉を一方の象徴とすれば、これに相對してもう片方の象徴になるのが〈Ridee〉です。フルートとピアノ、それにベースが加わるダンス・チューン3曲のメドレー。ここでは hatao がその卓越したテクニックをこれでもかというほどに繰り出してきます。しかもそれはテクニックのためにするものではなく、あくまでも楽曲の世界を拡張し、充実するためです。編成は最もシンプルですが、音楽が見せる表情と位相は複雑を極め、スピードもあって、これまたその魅力を十分に味わうには質の良いシステムで繰り返し聴きこまねばなりません。そして聴くほどに、奥へ奥へと惹きこまれます。

アルバムの全体は、この2つのトラックを二つの焦点として、その間に他のトラックがグラデーションを描く、という風に言ってみましょう。この録音には実に多様なものが大量に詰めこまれていて、全体像を把握するのが難しいのですが、こう言うことで、一つの足掛かりになると思います。

あるいは全体像を把握する必要は無いのかもしれませんが。気に入った、あるいは引っかかったトラックを繰り返し聴くだけで、十分見返りはあります。ひたすらに音楽の流れに身を任せているだけでも、やはり充実したリスニングはできま

す。その錯綜し、大きな変化に富む内容にもかかわらず、表面的には実に滑らかに、さらりと聴けてしまうものでもあります。そのように聴いて、何の支障もありません。

とはいえ、この後のアルバムを十分に味わうためにも、この二人の名義によるファースト・アルバムは、繰り返し立ち返る基準点になります。であれば、やはり一度は自分なりに「決着」をつけておきたくなります。そういうアルバムは実はそう多くありません。それはまた、音楽を聴く、味わう上での、おのれの器量を試されるものでもあります。言い換えれば、音楽を聴く、味わうとは自分にとってどういうことかを突きつけられるのです。

この文章を書き始めるまで、これほどのものとは思っていませんでした。傑作の1枚とは思っていましたが、いわばリスナーとしての鼎の軽重を問われるほどの作品とは思いませんでした。音楽の録音を言葉で紹介しようとすれば、自分なりにこういうものだとして把握しなければなりません。それができていないことに気がつき、そして把握しようとして、それがひどく難しいことに気がついて、あらためて腰を入れて聴き直しはじめたのでした。

これで筆者なりに「決着」がついたか、と言われれば、否と答えるしかありません。とはいえ、この方向からたどれば何とか把握できそうだと、という展望は見えたように思います。これもまた錯覚かもしれませんが、それもまた愉しからずや。皆さんが、それぞれに「決着」を求めて、愉しくも充実した体験をされますように。

#### ★編集部より

hatao & nami "Silver Line"はこちらで¥2,350にて販売しています。

<https://celtnofue.com/items/detail.html?id=118>

#### ■ (5)編集後記 ■

当メルマガ及び「ケルトの笛屋さん」のコラム・コーナーでは、ライターを随時募集しています。ケルト音楽に関係することで、他のメディアでは読めないもの、読者が興味を持ちそうな話題を執筆ください。頻度については、一度にまとめてお送りくださっても構いませんし、毎月の連載形式でも結構です。ご応募に際しては、

- ・ CDレビュー
- ・ 日本人演奏家の紹介

- ・音楽家や職人へのインタビュー
- ・音楽旅行記

などの話題で1000文字程度までで一本記事をお書きください。ご相談の上で、「ケルトの笛屋さん」に掲載させていただく場合は、1文字あたり0.5円で買い取りいたします。ご応募は [info@celtnofue.com](mailto:info@celtnofue.com) までどうぞ。

★ライブスケジュールは以下のページでカレンダー形式で掲載していますのでご利用下さい。

<https://celtnofue.com/community/event/>

★全国のセッション情報はこちら

[https://celtnofue.com/play/session\\_info.html](https://celtnofue.com/play/session_info.html)

★全国の音楽教室情報はこちら

[https://celtnofue.com/play/lesson\\_wide.html](https://celtnofue.com/play/lesson_wide.html)

=====

クラン・コラ：アイルランド音楽の森（月2回刊）

発行元：ケルトの笛屋さん

Editor : hatao

- \*掲載された内容を許可無く転載することはご遠慮ください。
- \*著作権はそれぞれの記事の執筆者が有します。
- \*ご意見・ご質問・ご投稿は [info@celtnofue.com](mailto:info@celtnofue.com) へどうぞ。
- \*ウェブ・サイトは <http://www.celtnofue.com/>
- \*登録・解除手続きはこちらからどうぞ。
- まぐまぐ！ <http://www.mag2.com/m/0000063978.htm>
- Melma! [http://melma.com/backnumber\\_98839/](http://melma.com/backnumber_98839/)

\*バックナンバーは最新号のみ、下記URLで閲覧できます。それ以前の号をご希望の方は編集部までご連絡下さい。

まぐまぐ <http://www.mag2.com/m/0000063978.htm>

Melma! [http://www.melma.com/backnumber\\_98839/](http://www.melma.com/backnumber_98839/)

=====

..... ↓ メルマ！PR ↓ .....

★—————★

ドキッ!!人生は運命ではなく腸で決まるってホント？



↓詳しくはコチラをクリック

<http://rd.melma.com/ad?d=l0b01R3FI061C6bnv0rGgodfA11aB4Bae35d345c>

.....↑メルマ!PR↑.....

---

■今回の記事はいかがでしたか？

下記ページより、あなたが記事の評価を行う事ができます！

[http://melma.com/score\\_v0v1H6vnU07GKoHfv1gaB4ma3dd38e91/](http://melma.com/score_v0v1H6vnU07GKoHfv1gaB4ma3dd38e91/)

このメルマガのバックナンバーやメルマガ解除はこちら

[http://melma.com/backnumber\\_98839/](http://melma.com/backnumber_98839/)

その他のメルマガ解除や登録メルマガの検索はこちら

<http://melma.com/contents/taikai/>

---